

令和 8 年度 千葉市 英語教育改善プラン

目標

- ・豊かな表現力を育む質の高い言語活動の推進
- ・小中接続への見通しを持ち、4 技能をバランスよく身に付ける授業の推進

☒ 言語活動
 ☒ 指導と評価の一体化
 ☐ 教師の英語力・指導力
 ☒ 校種間連携
 ☐ ALTの参画
 ☒ ICTの活用
 ☐ AIの活用
 ☐ その他

(パフォーマンステスト含む)

(専科教員含む)

(AIを除く)

1. 目標に対する現状

改善が進んだ点

①学習到達目標を指導者と児童で共有し、「何ができるようになるか」を明確にした授業づくりが行われている。

②目的・場面・状況の適切な設定を行い、英語でのやり取りや発表など「話す」活動を多く取り入れた授業実践が進められている。

③校種間等での交流活動において、実践校が少ない。複数のALTを活用しての学習活動も提案しているが実践に繋がらない状況である。

④市学力調査から、特にアルファベットの読み・書きが低い結果が出ており、「書く」ことにおいて中学校への接続に課題がある。

未だ改善が必要な点

2. 要因分析

①CAN-DOチェックの活用について周知に努めたことと共に、地域別研修会においても学びのゴールの共有やルーブリック作成及び活用について視点を設けて研修を実施したことが改善に繋がったと考える。

②質の高い言語活動を目指す千葉市英語教育スタンダードについて研修会等で周知を図っていることが授業づくりへの参考となり、促進されていると考える。

③交流活動について、指導者が学校間での調整等に負担感を持っていることが要因と考える。

④アルファベットの読み・書きや、文を書く（書き写す）ことにおいては十分な指導時間並びに学習時間を設けられていないことが考えられる。また、相手に伝えるなどの目的をもって「書く」活動等が不足していることも要因と考える。

3. 目標を達成するための施策・事業

①②千葉市英語教育スタンダードの周知及び研修会の充実
・小中接続と豊かな自己表現へと導く授業づくりを柱に、「指導計画と評価の的確な設定」「Small Talk」「中間指導の在り方」をポイントとして示し、作成した千葉市英語教育スタンダードの周知を進める。英語専科、学級担任の両指導者にとって授業づくり並びに指導の参考となるもの、学習者である児童が指導者によって差異を生じないようにするためのものとして、市内小中学校に示していく。また、市全体、地域ごとの研修会でも質の高い言語活動を実践している好事例について紹介していく。さらに、作成した参考授業動画の校内研修等での活用を促し、その効果についても検証しながら、英語力の向上を図っていく。

①交流活動の推進

校種間等の交流活動は小中接続の面からも小中の指導者間、学習者間双方によりよい相乗効果を生むと考える。同中学校区での小中交流授業事例、オンラインでの実践事例やALT活用事例等、学校現場の負担とならないような学習活動を周知、提案し、推奨していく。

②4技能をバランスよく身に付ける学びの推進

目的をもって書く活動の設定、文字、語彙、文章の「書く」ことを丁寧に指導する時間や個別に繰り返す学び時間の確保について研修会等で周知する。また、1人1台端末の活用や家庭学習での取組など、「読む」「書く」学びの効果的な事例をあげ、推奨していく。さらに、AIスピーキングアプリの活用についても事例を挙げ、授業や個別学習での活用を促し、4技能をバランスよく身に付ける学びの推進を図る。

令和 8 年度 千葉市 英語教育改善プラン

目標

小学校との学びの連続性を意識し、言語活動を通して、簡単な情報や考えなどを理解したり表現したり伝え合ったりするコミュニケーションを図る資質・能力を育成する。

○CEFR A1レベル相当以上の英語力を取得又は有すると思われる生徒の割合 (R7 : 55.9% ⇒ R8 : 63%)

☒ 言語活動 ☒ 指導と評価の一体化 ☒ 教師の英語力・指導力 ☒ 校種間連携 ☐ ALTの参画 ☐ ICTの活用 ☒ AIの活用 ☐ その他
(パフォーマンステスト含む) (AIを除く)

1. 目標に対する現状

改善が進んだ点

①CEFR A1レベル相当以上の英語力を有すると思われる生徒の割合は増加。(R6 50.8%⇒R7 55.9%)B2レベル相当以上を取得している教師の割合も増加。(R6 41%⇒R7 71%)
②市独自に実施している英語能力測定テストにおいて、4 技能の合計平均点到達率が増加。(R6 60.31%⇒R7 64.75%)

未だ改善が必要な点

①市学力状況調査において、観点別では「知識・技能」に比べて「思考・判断・表現」の平均正答率がやや下回る。(知技 61.5% 思判表53.5%)。領域別では「書くこと」の平均正答率が49.9%と、50%を下回る。
②「即興でやりとりをする力」を伸ばすための計画的かつ継続的な指導実践が少ない。
③小学校での学習内容を生かした言語活動が十分に行われていない。

2. 要因分析

①②研修会等において優れた実践例の紹介や情報共有を充実させたり、定期的な研究授業を開催したりすることにより、教師の指導力の向上につながったと考えられる。
また、1 人 1 台端末を活用することにより、生徒が自分の理解度に応じて学習を進めることができる機会が増え、英語力の定着につながったと考えられる。

①特に「対話の流れに沿って英文を書くこと」や「まとめた内容を説明すること」については低い水準となったことから、「目的・場面・状況に応じて伝え合う活動」の実践が少ないことが要因と考えられる。
②③教科用図書の内容を円滑に進めることに注力するあまり、形式的な練習が多くなっていると考えられる。また、他校や学校間の情報共有が不十分であると考えられる。

3. 目標を達成するための施策・事業

①②教師の英語力および指導力を改善するための施策
引き続き研修会を充実させ、効果的な実践例の紹介や情報共有を行う。時に研究授業前後の協議会では協議の視点を明確にすることで、課題解決にせまる機会とする。また、ICTを用いて指導例を蓄積、供覧できるようにし、指導改善につなげるための資料として活用できるようにする。
これまで市独自で問題を作成、実施していた英語能力測定テストについては、今年度は「英検IBA」による4 技能の測定を行うことにより、より正確かつ客観的な分析および生徒の学習状況の把握をする。

①②千葉市英語教育スタンダードの周知と実践
指導上の共通の指針として「年間計画と単元指導計画の的確な設定」「小中を貫く即興性を育む言語活動 (Small Talk)」「中間指導の在り方」「英語で進行、英語で授業」の4つのポイントを示し、周知と実践を進める。市内研究機関と連携し、各種研修会では外部講師によるスタンダードに関するワークショップを開催することで、理解を深める機会とする。また、市内教職員がアクセス可能なクラウド上に、スタンダードのポイントを意識した授業例の動画を格納し、サンプルとして閲覧できるようにすることで更なる周知を進める。

②「即興でやりとりをする力」を伸ばすための手立ての1つとして、「AIスピーキングソフト」導入における効果の検証を、令和7年度に引き続き行う。今年度は、A社ソフトの使用を3校、B社ソフトの使用を7校に依頼し、それぞれの具体的な使用事例及び効果を確認する。

③同一校種間だけでなく、Google Classroom等を活用したオンラインを含めた小ー中間の情報共有の機会を確保する。また、児童と生徒が互いに英語を使って交流をしたり、指導者が相互授業参観を行ったりする等、学区内の小中学校を中心とした交流授業を推奨する。小ー中連携の好事例については研修会等で紹介をし、自校の実践につなげられるようにする。

令和 8 年度 千葉市 英語教育改善プラン

グローバルな視野で活躍するために必要な資質・能力を育成するために、英語を通じて、相手の考えを理解し、自分の考えを相手に分かりやすく伝えようとする姿勢を身に付ける。

目標
○CEFR A2/B1レベル相当以上の英語力を取得又は有すると思われる生徒の割合
(R7 : A2以上 97%、B1以上 81% ⇒ R8 : A2以上 100%、B1以上 83%)

☒ 言語活動 ☒ 指導と評価の一体化 ☒ 教師の英語力・指導力 ☒ 校種間連携 ☒ ALTの参画 ☐ ICTの活用 ☐ AIの活用 ☐ その他
(パフォーマンステスト含む) (AIを除く)

1. 目標に対する現状

改善が進んだ点

未だ改善が必要な点

- ①授業でのALT等参画の具体的状況(言語活動における参画の状況)において、すべての項目で75%以上の授業で実施している。
(R6:47%⇒R7:100%)
- ②CEFR B1レベル相当以上の英語力を有する生徒の割合が増加した。
(R6:65%⇒R7:81%)
- ③英語担当教員が授業における発話の半分以上を英語で行っている学校の割合が増加しているものの目標の80%へは未だ道半ばである。
(R6:72%⇒R7:76%)

2. 要因分析

- ①②「ALT等の効果的な活用」と「言語活動の質的向上」が、生徒の英語力向上に直接的に寄与したと考えられる。具体的には、高校間でのALT等派遣を通して、日々の授業にALT等を組み込み、アウトプットを中心とした実践的な言語活動を継続したことが、生徒の技能定着に繋がったと考える。この相関関係は、文部科学省が示す「令和 6 年度『英語教育実施状況調査』の結果を踏まえた生徒の英語力向上に向けた取組の推進等について」とも合致している。
- ③多くの授業で教師と生徒によるコミュニケーション活動が展開されている一方で、文法事項の精緻な整理や大学入試への対応など、学習の目的に応じて、体系的な解説を中心とした講義形式の授業が展開されていることが考えられる。

3. 目標を達成するための施策・事業

- ①ALT等の更なる活用の促進
より充実した言語活動の実現に向け、年間指導計画の中に、ALT等による単独授業やチーム・ティーチングの授業を計画的に配置していく。また、生徒の英語力の更なる向上を目指し、ALT等の授業外の活動を一層推進していく。
- ②学びを実体験に活かすための施策・事業
授業において言語活動を通して身に付けた英語力を、実際の生活の場面の中で活かす事業を推進する。
(SSH事業における韓国連携校 1 校とのオンライン交流事業、タイ連携校 1 校と英語を用いた科学的共同研究、非英語圏の国との交際交流を通じた活動等)
- ③「千葉市英語教育スタンダード」の発信と研修
「英語で授業、英語で進行」を推奨している小中を貫く英語教育の指針を、令和 8 年度市内小・中学校等に発出した。義務教育段階で培われた英語運用能力を高校段階での継続・発展を目指し「千葉市英語教育スタンダード」を発信するとともに、学校訪問や悉皆研修を活用し教師の指導力向上を図る。

千葉市教育委員会

校種	指標内容		2023		2024		2025		2026		2027	
			目標値	達成値	目標値	達成値	目標値	達成値	目標値	達成値	目標値	達成値
高等学校	①CEFR A2レベル相当以上の英語力を有する生徒の割合（％）		100	100	100	100	100	97	100		100	
	①CEFR B1レベル相当以上の英語力を有する生徒の割合（％）		80	77	80	65	80	81	83		80	
	②授業における、生徒の英語による言語活動の割合（％）		75	71	75	88	75		75		75	
	③スピーキングテストとライティングテストの両方を実施した学校の割合（％）		100	58	100	60	100		100		100	
	④「CAN-DOリスト」形式による学習到達目標の整備状況	設定（％）	100	100	100		100		100		100	
		公表（％）	100	50	100		100		100		100	
		達成状況の把握（％）	100	100	100		100		100		100	
	⑤CEFR B2レベル相当以上の英語力を有する英語担当教員の割合（％）		100	67	100	83	100	92	100		100	
	⑥英語担当教員が授業における発話の半分以上を英語で行っている割合（％）		75	79	80	72	80	76	80		80	

校種	指標内容		2023		2024		2025		2026		2027	
			目標値	達成値	目標値	達成値	目標値	達成値	目標値	達成値	目標値	達成値
中学校	①CEFR A1レベル相当以上の英語力を有する生徒の割合（％）		60	47	60	51	60	56	63		65	
	②授業における、生徒の英語による言語活動の割合（％）		85	64	85		87		89		91	
	③スピーキングテストとライティングテストの両方を実施した学校の割合（％）		90	70	85		90		95		100	
	④「CAN-DOリスト」形式による学習到達目標の整備状況	設定（％）	90	93	100		100		100		100	
		公表（％）	50	43	70		80		90		100	
		達成状況の把握（％）	50	44	70		80		90		100	
	⑤CEFR B2レベル相当以上の英語力を有する英語担当教員の割合（％）		60	46	49	41	52	71	56		60	
	⑥英語担当教員が授業における発話の半分以上を英語で行っている割合（％）		70	57	65		70		75		80	

校種	指標内容		2023		2024		2025		2026		2027	
			目標値	達成値	目標値	達成値	目標値	達成値	目標値	達成値	目標値	達成値
小学校	「CAN-DOリスト」形式による学習到達目標の整備状況	設定（％）	60	63	65		70		72		75	
		公表（％）	25	36	45		50		53		55	
		達成状況の把握（％）	60	50	65		68		70		72	